

## コロナウィルスの中の保育

2020年8月4日 遠藤清賢

コロナウィルスによって人間の生活様式は大きく変化しています。様式だけでなく、いかに生きるのかという考え方も大きく変化しています。このウィルスは他者と近づき、飛沫感染することで拡大してきました。そしてこのウィルスを抹殺する有効な薬剤やワクチンがないため、短時間で世界中に拡散してしまいました。このウィルス自体は強い毒性を持ってはいませんが、感染した人によっては重篤な状態になってしまいうこともあります。感染しないためには他者と一定の間隔を保ち、ウィルスを体内に入れないためにマスクや手洗いをすることが求められます。他者との一定の間隔を保つということは近づかないということです。ですから親睦等の交流を持たないということになります。大人数の密集や密接した環境、空気の対流しない密閉した環境を避けることが予防の基本的な行動になっています。ということは他者との関係を持たない、行動範囲を狭くし極力移動を少なくするということになります。

このような状況の中で子どもたちの保育をどのように行えばよいのか多くの施設はその対応に苦慮しています。感染を予防するため本来あるべき保育対応ができないのです。感染しないこと、感染させないことのためには、施設関係者以外は施設に入らず、保護者であっても施設内への立ち入りは禁止している保育園もあります。給食も距離を保ちアクリル板で飛沫を飛ばさないようにしている施設もあります。施設以外の方々の交流は行われなくなりました。遠足や運動会、発表会を中止する保育園がかなりあると思います。本来、保育園で子どもたちは基本的な体の動きを身につけ、多くの友人との関わりながら他者との関係性を獲得し心身を成長させてきました。基本的信頼感を獲得し、自己肯定感を身につけ、生きることの喜びを感じられる人間に成長することが保育によって育まれてきましたが、コロナから身を護るために、これらの保育対応はできないのです。感染予防と命を存続することがすべてにおいて最優先されています。

この状態が何年も続いてしまったら、子どもたちは保育園の中で家族から受けた愛情を自分のものとして成長し、自らもその愛情を実践できる人間になることができるのかどうか心配です。今まで人間が信仰や子育て、多くの人々との交流や協力によって長い間育んできた生きるための目に見えない力が失われてしまっただけではないのです。人間は今一度自分の生き方を考えなければなりません。感染者を排除せず、あらゆる防備を駆使し感染者を支え励ます社会を目指さなければ、大切な信仰も愛情も生きる力もすべて失われてしまうでしょう。あらゆる知恵を絞り神に祈りながら支えあう社会を目指さなければなりません。保育園は感染予防と通常保育を併行して継続できるように努力しなければなりません。知恵を出し合ひましょう。